

3. 留学生会館から国際学生宿舎へ

ー理想と現実、そして共生への課題

太田 浩（一橋大学商学研究科専任講師）

本章は第5回多文化交流フォーラムの講演録です。以下、講演の概要・講師を紹介しまして、当日の講演内容に入ります。

【第5回多文化交流フォーラム概要】

- ・日時：2006年12月21日午後5時半～午後7時半
- ・場所：京都大学国際交流セミナーハウス

【講演概要】

講師の太田浩氏は一橋大学の留学生センターにて留学生相談業務に携わる傍ら、日本学術振興会の国際交流戦略事業のアドバイザーを務められるなど、国際交流の分野で活躍をされています。太田先生は、夜も外国人留学生と日本人学生と一緒に住む同大学の国際学生宿舎で留学生の面倒を見ておられます。今回は太田先生の豊富な経験から多文化の学生達が共に生活する難しさや楽しさについて熱く語っていただきます。

【講師紹介】

太田 浩（おおたひろし）

1964年生まれ

1987年 國學院大学卒業（法学士）

1988年 学校法人東洋大学にて国際交流センター、板倉キャンパスの国際化に従事

1999年 University of New York at Buffalo, Graduate School of Education, Department of Educational Leadership and Policy(専攻: Comparative and Global Studies in Education)修士課程入学

2000年 同上、International Office に Graduate Assistant（助手）として採用

2001年 同上 教育学修士取得後、博士課程進学

2002年より 一橋大学商学研究科専任講師（留学生専門教育教員）

【講演要旨】

司会：

京都大学の国際交流センターの森と申します。

今日の講師をお願いいたしました太田浩先生をご紹介したいと思います。

太田浩先生は、一橋大学商学研究科に所属され、国際交流の分野で大活躍をされています。簡単にご経歴を申し上げますと。國學院大をでられました後、東洋大学の方で

ご就職になり、留学生受入に携われました。その後「State University of New York at Buffalo」の方に留学をされ、Comparative and Global Studies in Educationで修士号を取られました。現在は一橋大学で留学生センターのお仕事に携わられる一方で、夜は留学生の寮に帰って留学生たちの面倒を見ておられる。それも約400名以上の方の面倒を見ているというスーパーマンです。

大学の国際化についても非常に深い勉強をされておられます。文科省の「大学国際戦略本部強化事業」では現在、全国の20大学を選んで、特色ある国際化戦略の推進を計っていますが、同事業について学振の調査研究アドバイザーもやっておられます。『岐路に立つ日本の大学』という全国の大学の国際化と留学交流に関する調査報告書も書かれておられます。太田先生、よろしくお願いいたします。

はじめに

1) 国際交流との出会い

太田： 一橋大学商学研究科の太田と申します。よろしくお願いいたします。これまで3つの大学で仕事をしてきましたが、どの大学においても留学生関係宿舎との関わりを持ってきました。最初は、東洋大学の白山キャンパスに勤務しているとき、交換留学生を受け入れていた借り上げ宿舎でした。交換留学生は通常1年間しか在学しませんから、2年間を一つの単位とする日本のアパート契約にそぐわないところがあります。それで、自前の宿舎を持たない大学の場合、大学が一棟丸ごと借り上げ、交換留学生に提供する宿舎が必要となります。次に、同じく東洋大学の板倉キャンパス（群馬県）で勤務しているとき、留学生を優先的に入居させる民間の協力（提携）宿舎とソニーが撤退した後に残っていた元社員寮を大学が借り上げて、日本人学生と留学生の混住型宿舎としたもの、この二つの運営に携わりました。この板倉キャンパスにある国際地域学部という1997年に設置された学部は、留学生定員が設置の認可条件として文部科学省から課せられました。その数は、入学定員の3分の1で50名でした。人口1万1千人という小さな町にニュータウンが作られ、その一部として大学誘致され、急に毎年50名の留学生がやってくるようになったのですから、宿舎を確保するためには、保証人を要求せず留学生を優先的に入居させてくれる民間アパートと廉価な宿舎費を設定できる借り上げ型の宿舎が必要でした。

2) ニューヨーク州立大学での経験

その後、ニューヨーク州立大学バッファロー校に留学し、留学中は国際教育部で仕事をしていました。主として、留学生入学課(International Admission)で働いていましたので、新入生の入寮の際に立ち会うことがよくありました。アメリカの州立大学では学部1年生は、入寮が義務づけられているところが多く、学部の上級生、そして大学院生となるにつれて宿舎の環境やタイプも変わってきます。1、2年生向けのものは、いわゆるドミトリ

一と呼ばれているもので、個室はなく、大きめの部屋に2段ベッドが2つないし3つあり、4人から6人の学生でシェアするのが一般的です。学部の3、4年生になるとドミトリーだけでなく、アパートメント・タイプのもの、私の大学ではユニバーシティ・アパートメントと呼ばれていました、に入居することもできます。このタイプは、一つのユニットに個室が4つから6つあり、キッチンとダイニング・ルームおよびトイレとシャワーは共有の設備というものが典型的なものです。大学院生になるとアパートメント・タイプのもので、1つのユニットを2人でシェアするものがほとんどで、一人分のスペースが広がります。また、あえてロースクールの学生だけが固まっているような宿舎もあります。これは、宿舎でも学生同士が共に勉強できるような環境を提供するためです。また、アメリカの大学院では、家族を持っている学生も多いため、タウンハウスタイプの宿舎もあります。このタイプの宿舎は、キャンパスの外れのほうにあり、大学の施設と思えないくらい立派なものもあります。海外からの研究員や教員も大学院生用の宿舎に居住することが多いようです。

1. 一橋大学国際学生宿舎の主事として

1) 一橋大学国際学生宿舎の主事に

そして、一橋大学での仕事を心得、帰国する際に新しくできた国際学生宿舎の主事をやってみないかという話がありました。900名以上の学生が居住し、その半分以上は留学生となる日本では珍しい大規模な混住型宿舎ということを知り、単純に面白そうだと感じると共に、自分の経験を生かせる場になるかもしれないと感じました。今思えば、安易な決断であり、その後起こる様々な問題を知る由もありませんでした。しかしながら、それらの問題を解決していく過程で、私も多くのことを学んだと思います。今日はその経験を皆さんと共有したいと思います。

私が留学生主事をしている国際学生宿舎は、一橋大学小平キャンパスにあります。小平キャンパスは、以前本学の教養部があったところで、学部1、2年生の授業を行っていました。それが、国立キャンパスに統合され、現在は学部1年生から大学院まで一貫して国立キャンパスで授業が行われています。統合後は、本学の研究施設と学生宿舎や外国人研究者ゲストハウス、それに政府系の関連施設がある複合的な機能を持つキャンパスとなり、正式には「小平国際キャンパス」と呼ばれています。研究施設として、「国際共同研究センター」がありますが、その上部階には「放送大学多摩スタディセンター」が入っています。また、「如水スポーツプラザ」という一橋大学の卒業生会によって作られた本格的なスポーツジムがあり、一般に開放されているので、学生だけでなく市民にも多く利用されています。「小平カフェテリア」という生協による食堂があり、これも市民に開放されています。さらに、「大学評価学位授与機構」もあります。

国際学生宿舎は、2002年に一部開館し、翌年に完成したものです。新築のものと従

来の学生寮を改築したものがあります。七つの棟があり、それぞれA棟、B棟、C棟、D棟、E棟、S棟、N棟と呼ばれています。D棟が私の住んでいる夫婦・家族用の宿舎で、子供のいない夫婦だけの学生を対象とした「夫婦室」と子供のいる家族向けの「家族室」があります。S棟とN棟は、合わせて一橋寮棟と呼ばれることもあります。これはこの二つの棟が、新築ではなく、もともとそこにあった一橋寮を改築したものだからです。現在は北側にあるものと南側にあるものを、それぞれS棟、N棟と呼んで区別しています。D棟以外は、単身向けのものですが個室タイプと共用タイプの2種類があります。個室タイプは、一見すると一般のアパートのように見えます。キッチンやダイニング・ルーム、シャワー室や洗濯室は一つのフロアで共有し、そこを利用するためには外廊下を通ります。トイレや洗面台は個室についています。一方、共用タイプは、一つのユニットに6つの個室があり、キッチン、ダイニング・ルーム、洗面所、シャワー、洗濯室、トイレをユニット内の6人が共同で使います。共用の設備はユニットの中にありますから、そこへの廊下は建物の内側にあります。

2) 国際学生宿舎の留学生と日本人学生

現在、留学生とその家族が450名弱居住しています。日本人学生は330名ほどです。日本人学生用の部屋は実際には400室ぐらいいります。全室埋まっていないのは、宿舎整備の過程で大学院生用の部屋を増やした関係上、修士課程1年次から博士課程3年次までの学年進行を考慮し、学生の入居を毎年段階的に行っているためです。現状、居住者の比率としては、留学生とその家族が全体の60%と日本人学生よりも高くなっています。

留学生は、1年間の短期プログラムから博士課程の学生までおり、国籍も40カ国以上、日本語能力も初級から超上級までと多様です。本学には国際企業戦略研究科という英語による大学院もあるため、ほとんど日本語ができない留学生もいます。さらに、留学生は本学だけでなく、東京学芸大学、電気通信大学、東京農工大学からも受け入れているため、彼らの専門領域も多岐にわたっています。

日本人学生については、国際学生宿舎内に準自治寮（自治組織）があるというような居住形態が存在しています。これは、簡単に言いますと、伝統ある一橋大学の学生寮が新設された国際学生宿舎という箱に移ってきたというようなイメージです。国際学生宿舎は、一橋大学全体の学生寮（旧自治寮）の整備として作られた側面があり、まったく新規の留学生・日本人学生混住宿舎整備事業ではありません。よって、留学生居住スペースを除くと、昔の寮の建て替えおよび改築という位置づけにあったと言えます。また、宿舎の質の向上という面もあり、共用タイプ中心の寮から個室タイプを中心とした宿舎になっています。正式には、自治寮はすでに存在していませんし、昔の自治寮のような管理運営は、少なくとも大学と寮生の間では行われていません。

しかしながら、日本人学生は国際学生宿舎として、新しい宿舎に居住しているというよ

りは、従来からある一橋寮（学部1、2年生）、中和寮（学部3、4年生）、院生寮（大学院生）というブロック内で居住しており、それぞれの寮単位で学生は活動しています。三つの学寮が、それぞれ独立した建物だったものから、国際学生宿舎という大きな枠組みの中に入ったようなものです。院生寮は大学院重点化で増えた大学院生に対応するため、入居者数の枠が拡大し、国立キャンパスから小平キャンパスに移って来ました。中和寮は現在も国立キャンパスの近くにある宿舎ですが、ここも改築の際に個室を増やした関係で居室数が以前より少なくなり、同じ受入れ学生数を確保するため、小平キャンパスの国際学生宿舎に一部移動し、「飛び地」のようなかたちで入居しています。このような経緯から、国際学生宿舎は混住寮と言われながらも、実際には日本人学生と留学生が同じフロアで居住しているという状況にはなっていません。4大学の留学生と一橋大学の3つの寮生がそれぞれブロックごと（区割りごと）に居住しています。

3) 戸惑いの連続

このような経緯を知らないまま、私はこの宿舎に入居したため、最初は戸惑うことの連続でした。本音と建前が複雑に絡み合っていて、事情を把握するだけで相当の時間を要しました。小平国際学生宿舎が一部開館した2002年は、国立大学法人化の前年であり、この宿舎は「東の東京国際交流館（お台場）」、「西の小平国際学生宿舎」という二つの国際大学村を東京につくるといふ大きな構想が基礎になっていると聞いていただけに、一橋大学固有の寮整備という現実的事業とのギャップは相当なものでした。正直言って、大学からもらった書類に書いてあった「留学生と日本人学生との交流を可能にする居住・研究・教育空間の一体化」という文章がむなしく思えました。

日本人である私でさえ、理解しづらい仕組みですから、留学生にとってはさらにわかりにくいものであることは、容易に想像できます。例えば、東京学芸大からの留学生は、ほとんどが短期プログラムの学生です。成田空港から宿舎に直接やってきます。短期プログラムは主として英語による授業を受けますから、日本語能力は一般的に低く、来日前の情報量も少なく、宿舎のこともよくわからないまま来日する学生が多くいます。来日した途端に大学の宿舎に行き、入居してみると周りが留学生だけというのでは、彼らの期待している日本人学生との交流は十分に行われず、多くの不満を耳にします。

さきほど触れた中和寮の「飛び地」の学生は30名と少ないため、現在、試行的に一部が留学生と同じフロアに住んでいます。これ以外で、留学生と一緒に住んでいる日本人学生は、留学生ブロックに住んでいるRA（レジデント・アシスタント）だけです。4大学の留学生居住者と日本人RAで一つの寮組織をつくり、それが一橋大学の各学寮組織に対応するという位置づけにあり、「留学生寮」と呼ばれています。

4) 留学生寮の図式、フロアリーダー会

留学生寮の居住者の視点から一橋大学の国際学生宿舎関係部署や関係者、そして居住者を図式化すると、5番のスライドのようになります。館長である副学長を頂点に、宿舎全体の主事と留学生居住者を担当する留学生指導主事がある下であり、管理運営を担う事務組織として留学生課と学生支援課、そして国立キャンパスにある学生支援課の出先として、小平キャンパスにプラザ管理室があります。留学生指導主事が私です。

他に、一橋寮担当、中和寮担当、院生寮担当の主事がそれぞれいます。その下に留学生寮の場合は、フロアリーダー会と呼ばれる委員会組織があります。一橋大学の各3学寮についてもそれぞれ委員会組織があり、一橋寮委員会、院生寮委員会などと呼ばれています。委員会は学寮組織において、執行部のような役割を果たしています。フロアリーダー会は12名のRA（ときにチューターとも呼ばれています）と34名のFL（フロアリーダー）によって構成されています。先ほども申しあげたとおり、RAは日本人学生ですが、FLは留学生で、留学生が居住しているブロックの各フロアから選出されます。留学生寮（留学生ブロック）の内部はフロアを一つの単位として、グループ化しており、その代表がFLです。そして、その下に留学生寮の居住者（留学生とその家族）がいるというようなイメージです。

フロアリーダー会は、毎月定例の会議を行っており、そこで予算や行事をはじめ留学生寮にかかわる多くのことが決定されます。この定例会議には、留学生指導主事もアドバイザーとして出席します。その定例会議を円滑に進めるため、事前にRAはRA会議を開いています。FLは定例会議に担当フロアの居住者から提起された問題や要望を伝えます。また、定例会議で決まったことを担当フロアの居住者に伝える役割も担っています。この役割を含め、フロアというグループ内でのコミュニケーションを図るために、FLはフロア会議を開きます。FLは毎月4千円の謝礼金を受け取ります。その資金は留学生居住者が毎月払う留学生寮会費から賄われています。

留学生は4大学から来ており、理工系の学生は研究室に泊り込むことも多いため、留学生寮の居住者間のコミュニケーションは、主にメーリングリストによって図られています。留学生居住者全体を対象としたもの、フロアリーダー会メンバー用（FL、RAと留学生指導主事）、RA用（RAと留学生指導主事）の3種類のメーリングリストがあります。全体を対象としたメーリングリストには、プラザ管理室、留学生課の職員も入っており、大学側から留学生居住者への情報伝達手段としても使われています。

5) フロアリーダー会の重要性

そして、フロアリーダー会は、学寮の委員会組織にあたりますから、一橋寮、院生寮、中和寮との間で、問題が起きた時や共同で行事をする際に3学寮の委員会のカウンターパートとして協議の席につきます。大学との関係では、フロアリーダー会は学寮委員会組織として、館長である副学長が招集する国際学生宿舎専門委員会に出席します。フロアリー

ダー会からこの専門委員会に出席しているのは、一橋大学のRAです。宿舎専門委員会には留学生課、学生支援課、主事、指導主事が出席します。このようなことから見ても、フロアリーダー会という組織が、留学生寮という留学生居住者の枠組みの中においても、大学との関係においても重要な役割を果たしていることがわかります。このフロアリーダー会を立ち上げ、留学生寮という組織を確立したことが、私の5年間近くになる留学生指導主事としての仕事の中でいちばん大きかったと思います。

フロアリーダー会が機能し、留学生寮という組織が学内で認められるまで、留学生居住者は宿舎での生活における要望や問題を提起する場と機会を持っていませんでした。極端な言い方をすると、国籍も、所属大学も、学年もバラバラである留学生居住者は団体で交渉する術を持っていなかったため、宿舎の管理者側から見れば、個人としての対応で済む扱いやすい居住者だったものを、私が自治寮を想起させる組織にまとめ上げたこととなります。よって、当初は学内関係者から煙たがられたり、誤解を受けたりすることもありました。私から見れば、国際学生宿舎専門委員会での議論に留学生の意見や意志が全く反映されず、留学生の存在が無視されているかのような状態で、国際学生宿舎にかかわる事項が決められていたことを改善したいという一心でした。国際学生宿舎という看板を掲げていながら、留学生が何も言えないような状況に偽善的な感じさえ抱いていました。

6) 大学の留学生担当組織

次にスライドの7番を見てください。ここには4大学を含めた国際学生宿舎の留学生居住者にかかわる部分の組織図が示されています。これはフロアリーダー会から見た組織図で、大学の公式な資料ではありません。一橋大学以外の3大学においては、外国人留学生を担当する課が国際学生宿舎の担当になっています。国立大学法人化後、留学生センターが、国際センターや国際交流センターに改組されたように、留学生課も国際課や国際企画課というように改組されてきています。ここに示すとおり、3大学についても、私と同様に国際学生宿舎の指導主事がいます。本学については、留学生居住者は、留学生課が担当していますが、宿舎そのものの主管部署は学生支援課です。そして先ほども申しあげたように、プラザ管理室という宿舎にある管理事務所は学生支援課の一部です。また、守衛室や清掃業者も学生支援課の管理下にあります。

国際学生宿舎における留学生居住者に関する問題や4大学間の連携を図るために、1年に2回(春と夏)「国際学生宿舎4大学会議」を開催しています。この会議には、RA、一橋大学学生支援課、各大学の国際学生宿舎担当課、指導主事が出席します。この会議を持つようになったきっかけは、2002年の開館後、年が経つにつれて人事異動により担当者が変わり、事務的な事項がきちんと引き継がれていなかったり、一橋以外の3大学において国際学生宿舎に対する関わり方に変化が出てきたりしたからです。端的に言うと、3大学の中には入居者を選考さえすれば、あとは一橋大学にお任せという大学も出てきま

した。この4大学会議の開催は、RAと主事である私からの強い要望によって、実現しました。

7) 必要だった組織体制の改善

4大学会議の成果の一つとしてあげられるのが、組織体制を次のスライドの8番にあるように改組したことです。改組前の問題として、スライドの7番にあるように、フロアリーダー会のところから棒線がプラザ管理室、一橋大学留学生課と指導主事、そして3大学の留学生担当課と指導主事に伸びていました。この図には抜けていますが、実際にはフロアリーダー会から一橋大学学生支援課へも、点線を入れておくべきかと思います。

この体制の問題点は、宿舎内で留学生にかかわる問題が起きたり、要望や改善を申し入れられたり、新しい提案をしたりということをフロアリーダー会から大学関係者に行おうとするときに、RAやFLはどこに話を持っていくべきか迷ってしまうということです。一橋大学以外の留学生居住者に関して、問題が起こったとき、その問題が宿舎のことをよくわかっていなければ理解できないようなことである場合、留学生の所属している大学の宿舎担当者に訴えても、なかなか理解されないことがありますし、現場にすぐに来てもらうことも簡単ではありません。かといって、一橋大学の関係事務室に持っていても、一橋大学の学生でないからという理由から、親身に対応してもらえないこともありました。RAや留学生居住者が大学を越えてたらい回しされることもありました。

プラザ管理室のワンストップ・センター化

そこで、この問題を4大学会議で協議し、スライドの8番にあるように改善しました。この図では、プラザ管理室とRAが一体化したように書かれています。そして、プラザ管理室から各大学の国際学生宿舎担当課と本学の学生支援課に実線が伸びています。つまり、RAと現場のプラザ管理室がもっと密接にコミュニケーションを取り、問題や改善すべき事項を共有し、その問題の内容に応じて、プラザ管理室が関係部局に連絡を取るというシステムに変わりました。

いくなれば、プラザ管理室が国際学生宿舎のワンストップ・センターになったということです。このワンストップ・サービス化の少し前に、別途2つの改善が大学側で行われました。

1つ目は、プラザ管理室に学生支援課の専任職員1名が常駐するようになったことです。それまで、プラザ管理室は一橋大学の職員を退職した方々がアルバイトとして雇われていて、日々の管理運営はその方々によって行われていました。国立キャンパスの学生支援課が遠隔操作しているような状態で、学生支援課や留学生課の対応が遅れる、あるいはプラザ管理室に責任ある対応ができる専任職員がいないために、場当たりの対応で済ませるということが多々ありました。

2つ目は、プラザ管理室の管理運営業務の一部がアウトソーシング化され、それを請け

負ったのが守衛室で警備を担当している会社でした。この2つの改善によって、プラザ管理室、学生支援課、警備室の一体化が図られ、居住者からも、問題や要望への対応が早くなったと好評を得ました。この3つの事務組織の一体化とプラザ管理室のワンストップ・センター化によって、留学生居住者の現場からFLを通して、RAに挙げられた問題がプラザ管理室を通して、適切なチャンネルによって、対応してもらえるようになりました。RAやFLのそれまでのストレスも軽減されたと思います。

RAの役割

次にスライドの9番に移ります。ここではRAとFLの役割を説明します。RAは12名いると申しあげましたが、そのうち半分は一橋大学の学生で、残りの6名は3大学の学生です。東京学芸大学から3名、電気通信大学から2名、東京農工大学から1名となっています。各大学のRAの数は、各大学の留学生居住者数とだいたい比例していますが、東京学芸大学のRAだけ、留学生数に比べると多くなっています。これは国際学生宿舎に居住する東京学芸大学の留学生のほとんどが、短期プログラムの留学生で日本語力が低く、サポートもそれ以外の留学生に比べてより必要性が高いという背景があります。

基本的に、国際学生宿舎のRAも、他の留学生が住んでいる宿舎、例えば国立大学の留学生会館と同様に、留学生居住者への助言とサポートという大枠では似通っていますが、先ほど申し上げたような一橋大学国際学生宿舎独特の事情により、それ以外の重要な役割を担っています。

RAは、自分の担当階（フロア）を持っています。3つ程度のフロアを担当し、大学の所属に関係なく、担当フロアの留学生居住者へのサポートを各フロアのFLと共同で行います。担当フロアは、RAの居住している階とその上下というのが一般的ですが、居住階と担当階が離れている場合もあります。できるだけ、この担当階制がうまく機能するように、RAが交代するときに居室の位置を調整しているところです。

次に、RAは先ほど申し上げた留学生居住者にかかわる自治組織である「留学生寮」とその執行部である「FL会」の管理運営を担っています。フロアリーダー会は、他の3学寮の委員会と同様に宿舎内に専用の部屋、委員会室も持っています。プラザ管理室のあるプラザ棟という建物の中にあります。この建物には、ラウンジや会議室もあり、フロアリーダー会の定例会議は毎月第2金曜日を基本として、このプラザ棟のラウンジで開かれます。

RAは、フロアリーダー会の管理運営を行っていく上で、それぞれ役職を持っています。その役職は、代表、副代表、企画、広報、備品、書記、会計です。代表と副代表は、フロアリーダー会を統率するとともに、フロアリーダー会を代表して、大学の国際学生宿舎専門委員会に出席したり、他の学寮委員会との話し合いを行ったりします。企画は各種イベントを担当し、広報は留学生寮のウェブサイトを管理したり、留学生居住者向けのハンド

ブック作成における編集を担当したりしています。備品は留学生寮として生活用品を共同購入したり、留学生居住者が借りられる様々な備品の購入と管理を担当しています。書紀は留学生寮およびフロアリーダー会にかかわる各種書類の作成・管理を担っています。会計は留学生寮会で徴収している留学生寮会費、いわゆる自治会費の管理を担当しています。

留学生寮会費

国際学生宿舎の留学生居住者は、毎月宿舎費の支払いとともに、自治組織の運営を支える留学生寮会費を2千円支払っています。留学生の居住者は、その家族を除くと400名強ですから、年間の予算は990万円近くになります。この会計について、留学生居住者にはもちろんのこと、大学の関係部署にもきちんと毎月報告することにより透明性と公正性を確保するだけでなく、留学生居住者の要望に対して経費面で対応できるよう工夫をしています。この留学生寮会費は、当初留学生寮とそのフロアリーダー会が組織として未熟だった頃は、毎月500円でした。組織が整備され、きちんとした予算管理と会計報告ができるようになってからは、他の3学寮の自治会費とほぼ同額の2千円となりました。

備品というRAの役職のところで、「生活用品の共同購入」と言いましたが、これはこの留学生寮会費が充てられています。キッチン用品を中心とした共用部分の消耗品を留学生寮会で一括購入し、フロアリーダー会の定例会議の際に、備品担当のRAからFLに配布されます。

新規入居者へのガイダンス、ハンドブックの作成

留学生は国際学生宿舎に4月と10月の2回入居してきます。その新規入居者に対して、RAはプラザ管理室の行う大学としてのオリエンテーションに協力するだけでなく、FLと共に独自のガイダンスを行っています。ここで重要なことは、国際学生宿舎での生活に関する情報提供だけでなく、留学生寮、フロアリーダー会、RAとFL、留学生寮会費、フロアごとのコミュニティなど留学生居住者の自治組織に関する説明をきちんと行っていることです。日本語力が高い留学生に配慮して、ガイダンスの説明とパワーポイントは日英両語で行っています。

また、最近ビデオも作成され、視覚的な情報を与えることで効率的にガイダンスを行っています。先ほど申し上げたように広報担当のRAを中心に、留学生居住者用のハンドブックの改訂や編集も担っています。編集作業では、プラザ管理室も積極的に協力してくれていて、大学から提供したい情報とフロアリーダー会から提供したい情報がコンパクトに一冊のハンドブックにまとめられています。ガイドブックは、日英両語で書かれているだけでなく、留学生の新規入居者の目線で書かれており、私から見ても非常によくできていると思います。宿舎の近隣の商店や公共施設についても、地図を含め細かく書かれています。学生が関わらなければ、ここまでのものはできないだろうと思います。留学生寮会・

フロアリーダー会のウェブサイトにも掲載されていますので、ぜひご覧ください¹。

それから、年度末には、書記担当のRAを中心に、フロアリーダー会の成果報告書をまとめています。さらに、RAは危機管理、安全管理や防犯防災にも積極的に取り組んでいます。これについては特に熱心で、大学や指導主事である私からの助言が特にあったわけではないのですが、当初から組織的に取り組んでくれています。宿舎内の防災設備の整備状況や避難経路を点検したり、小平市のいっつき避難所を確認したり、防犯に関する問題点をまとめてくれたりと、本来大学が対応すべき問題についても集約してくれました。留学生は、往々にして、地震に対する認識が薄いということで、立川にある防災館へのバス・ツアーも実施しています。

男性： RAは日本人学生だけですか。

太田： そうです。日本人学生だけです。

FLの役割

男性： フロアリーダーはどうですか。

太田： フロアリーダーは留学生だけです。日本人学生と留学生が本来の意味で混住してないので、RAは日本人学生とし、留学生を支援するために留学生ブロックに居住する、フロアリーダー（FL）は留学生ブロックの各フロアの代表というように分けています。

一つ問題なのは、RAの居室は留学生の部屋を使っていることです。つまり、留学生が入るべき部屋に、RAとして日本人学生が入っているので、その分留学生の部屋が全体としては減るということです。ですから、現在留学生の居室として割り当てられているところから12室分はRA用になっているということになります。450名弱の留学生とその家族に対して、12名のRAと言うのは、はっきり言って少ないです。しかしながら、そこでRAを増やすと留学生の部屋が減ってしまうという問題があるのです。これを解決するためには、本当の意味で日本人学生と留学生の混住を図るか、RAの部屋を大学裁量分の部屋として別枠にしてもらわなければならない、現在は後者の方で大学に交渉しています。

FLの役割は、先ほども申しあげましたように、RAや定例会議に担当フロアの居住者から提起された問題や要望を伝えたり、定例会議で決まったことをフロアの居住者に伝えたりする役割を担っています。この役割を通して、フロア内でのコミュニケーションを図るだけでなく、フロアでのコミュニティづくりと問題解決にあたります。FLはそのための場として、フロア会議を開きます。また、フロア援助金の会計も担っています。このフ

¹ <http://www.fedu.uec.ac.jp/tamayashiki/>

フロア援助金と言うのは、半期ごとに各フロアの人数や居住形態に応じて計算された金額をFLからの申請に応じて会計担当のRAが支給するものです。

フロア援助金の使い方は各フロアの裁量に任せていますが、一般的にはフロア内の居住者の親睦を深めるためのパーティを行ったり、フロア内の居住者が共同して使えるものを買ったりすることが多いようです。自由度の高いお金ですが、留学生寮会費から拠出しているものなので、FLからの援助金申請と支給、その後の領収書を添付しての使途の報告と会計処理は、会計担当のRAによってきちんと管理されています。

平たんではなかった道のり

FL、RA、フロアリーダー会、留学生寮会という一連の仕組みと組織を私とその時々々のRAやFL、そして留学生課や学生支援課ならびに学生・教育担当副学長の支援の下、作りあげていったわけですが、その道のりは決して平たんなものではありませんでした。FLという制度をつくり、なんとか留学生の自治組織を立ち上げられないか思案しているときに、東京学芸大から2名のRAが入居するようになったという連絡がありました。最初に学芸大がRAを付けたのは、学芸大からの留学生入居者がほとんど短期プログラムの留学生であり、かつ新規渡日者で日本語能力も十分でない状態で、他大学の学生宿舎に居住するという適応面から難しい状況に置かれていたからです。そのような状況で、入居後、プラザ管理室に問題をかかえて、やってくる学芸大の短期プログラム留学生が他の留学生に比べてかなり多いという状態でした。

留学生関係の仕事をされた方であれば、おわकारの通り、留学生の中でも国立大学の短期プログラムの学生は、その他の学位取得留学生に比べて、特別なケアが必要です。一般的な言い方をすれば、余計に手間がかかるということです。学芸大学の短期プログラムが始まったのが、国際学生宿舎の開館時とほぼ同じでした。当初、私自身が「学芸大学は、短期プログラムの留学生が正規課程で学位を取るために来ている留学生に比べて、特別なケアが必要なことは明らかであるにもかかわらず、なぜそのような留学生を一橋の宿舎に入居させるのだろう。普通だったら、大学院課程の留学生など滞り期間の長い留学生を入居させるべきではないか」と不満に思っていました。しかしながら、後に、学芸大学にはもともと宿舎が少なく、多くの留学生が一般のアパートに居住しているということを知りました。

学芸大学が短期プログラムを開設することを決めた理由の一つも、一橋の国際学生宿舎に一定数の留学生を入居させられるということが確なものとなったからだと思います。そういうわけで、学芸大学も最もケアを必要とする留学生を一橋大学の宿舎に預けているということに対して、責任を感じられたのでしょうか、最初にRAを送ってくれました。ほぼそれと同じ時期に電気通信大学からもRAが1名入居してきました。その後、東京農工大学からも1名のRAが入居しました。合計で4名のRAがそろったのですが、肝心の一橋

大学にはRAが付きませんでした。

大学の留学生課や学生支援課には、何度か交渉したのですが、その時の回答は「3大学は、留学生しか入居していないので、日本人のRAを入居させたのでしょうか。しかしながら本学の場合は、あれだけ多くの日本人学生が居住しているわけですから、必要ないでしょう」というものでした。私は「冗談じゃない。日本人学生の居住者はすべて、自治寮の寮生として入居しているのであって、国際学生宿舎に入居しているという意識はありませんよ。自治寮内の交流や行事で忙しく、留学生との交流すらありません。そもそも、留学生と日本人学生を別々のフロアに入居させたのは、大学の方ではありませんか」と強く訴えました。開館直後に指導主事として海外から入居した私にとって、当時は国際学生宿舎を取り巻く大学の内部事情に関する情報も多くありませんでした。また何かのアイデアを実現するための交渉の持って行きかたも国立大学ということで、これまで経験した大学に比べると実に複雑怪奇で、それを理解するには相当の時間がかかりました。

1年生、小林君の手助け

そのように悩んでいる時期に、一橋寮に住んでいた1年生の小林君という男子学生が、突然私の研究室にやって来て、「他大学から留学生のためにRAが入居したことを知りました。私もRAにしてもらえませんか」と聞いてきました。私は本学だけRAの制度がないため、彼が希望しても採用できないことを説明しました。すると彼は「ボランティアで結構です。お金は要りませんから」と言ってくれました。

それで彼を非公式な5人目のRAとし、やっと4大学のRAがそろい、FLとともにフロアリーダー会をつくる基礎ができました。その後、東京学芸大学は、短期プログラムの学生が当初より少し増えたことからでしょうか、RAを1名増員してくれました。電気通信大学も1名増員してくれました。本学は、この小林君がほぼ1年間無給でRAをやってくれた後、それまでの交渉が実り、ついにRAを制度化してくれました。その後は、留学生居住者のほぼ半分が本学の留学生であることを理由に6名まで増員することができました。こうして現在のRA12名体制ができました。一橋大学の第1号RAである小林君は、RAが制度化され、謝礼金が出るようになってからもRAを継続し、卒業まで務めてくれました。

今日お配りした資料に **Bridges** という雑誌の抜き刷りがあります。そこにRA、当時はチューターと呼ばれていましたが、のエッセイとインタビューが掲載されています。最初の一橋のRA（チューター）である小林君と2番目のRAである鮎合君のエッセイ、そして **Bridges** の編集委員によるRA（チューター）4人へのインタビュー記事です。この **Bridges** という雑誌は留学生センターが年1回発行しているもので、一橋大学における国際交流、留学生交流にかかわる事項が満載されているものです。国際交流を行っているサークルや国際的な教育研究や活動を行っている教員や学生の紹介などが主な記事ですが、毎

回「小平通信」というコーナーを設けており、そこに先ほど申し上げたようなRAのエッセイやインタビューが掲載されます。この雑誌は、PDF化して、留学生センターのサイトにも掲載されているので、お時間のあるときにぜひご覧ください。

就職に役立つRA経験

先ほどの小林君は卒業後、ボッシュというドイツの自動車関係部品のメーカーが新しく作った奨学金制度に申請し、最初の受給者となり、ドイツの大学でMBAを学んでいます。鮎合君は本学の交換留学生試験に合格し、フランスのパリ政治学院で学んでいます。学芸大学から来た最初のRAであった女子学生は、卒業後国際協力事業を行っているNGOに入り、現在アフガニスタンのカブールに滞在して援助活動を行っています。彼女の現地での活躍は朝日新聞のコラムにも掲載されました。もう一人の学芸大学からの最初のRAだった男子学生は、日本語教師としてコロンビアに派遣されるプログラムに合格しました。現在RAをしており、3月に卒業する女子学生はJICAへの就職が決まりました。企業に就職したRAも、最初から海外赴任を想定して採用されたものが数名いました。いずれの場合においても、国際学生宿舎でRAを務めたことが、面接で大いに役にたった、面接で「売り」になったと言っています。RAとして宿舎に住んでいるときは、いろいろと大変な経験をするのですが、その経験が就職、特に面接試験に際しては、大きな武器となるようです。RAを務めた学生は、それぞれ自分が解決した問題の生々しいエピソードを持っています。問題解決型学習の成果をたくさん持っていると言えるでしょう。それを面接で披露すると、相当強いメッセージとして面接官に伝わるようです。ちょっと大袈裟な言い方をすれば、雇用者側が求めている問題解決型人間が国際学生宿舎のRAという仕事によって、育成されているのだと思います。日々、異文化間コミュニケーションの現場において、世界各国からの留学生の抱える問題を解決していく過程で、RAの学生は他の学生が持っていないような能力を身につけています。それにプラスして、自治組織の管理運営もやっていますから、マネジメント能力もつきます。450名程度の多種多様な構成員を持つ自治組織で、年間990万円ぐらいの予算を動かしているのですから、その経験談は説得力があって当然です。しかも、多くの仕事がボランティアベースで、時には深夜や早朝にも留学生の対応することもあります。このボランティア精神の実証も雇用者側に高く評価されるようです。RAへの報酬は、大学では給与と呼ばずに謝礼金と呼んでいます。

RAと語学

男性： RAになるための資格として、バイリンガルでなければいけないなど、そういう条件はありますか。

² <http://cse.hit-u.ac.jp/publications/publication.htm>

太田： RAは公募しますが、その時に「外国語能力があるほうが望ましい」としています。しかし、それを応募資格として厳密に適用することはしていません。他には、院生が望ましいというようなメッセージは出していますが、それもあくまで「望ましい」という程度です。結果的には院生の応募が多いのが現状です。語学力よりも大事なものは、やはりボランティア精神や、やる気だと思います。これに自信がある学生には積極的に応募してもらっています。応募に際しては、指導教員からの推薦状は出してもらおうようにしています。

男性： 大体450名程度の留学生の中に、短期プログラム留学生はどのくらいの割合ですか。

太田： 純粋な短期プログラムの留学生は、先ほど言った東京学芸大の30名ぐらいです。それにプラスして、一橋大学の交換留学生、研究生、日本語日本文化研修生のような短期留学の学生がいます。人数はだいたい10～20名ぐらいでしょうか。

男性： 留学生の抱える問題を解決する際に、言葉の障害などもあります。

太田： あります。特に、短期留学生や研究生の場合、どうしても英語で説明しなければうまくいかないということがあります。これまでは、RAに1名か2名ぐらいは交換留学を経験した学生がいましたので、なんとか対応できています。どうしてもうまくいかないときは、私が英語で対応します。交換留学を経験した学生は、自分が留学した時に留学先でRAやチューターに助けてもらったというような経験があり、RA候補者としては有力です。

RAの人選の重要性

これに関連した話から次のスライドにある「成果と課題1」に移ります。RAの人選と言うか、選抜はとても重要です。RAは学生ですから、卒業していきます。毎年、メンバーが変わってきます。そういう状況のなかで、留学生寮の自治、フロアリーダー会の管理運営ができる人材をRAとして、揃えることは本当に大変です。国際学生宿舎の主事をやってみて、「組織は人なり」という言葉をこれほど痛感したことはありませんでした。

RAがきちんと制度化されてからは、学内で公募をしています。公募期間中に私や現職のRAから、学生に対して応募を呼び掛けることもあります。いわゆるリクルーティングをするわけです。今振り返ってみると、初期のRAには、一橋大学の3学寮の委員会で役職を務めたような学生が多かったことが、結果として、留学生寮とフロアリーダー会の組織づくりにとって、良かったと思います。寮委員会の委員や役職を務めた学生と言うのは、

やはりリーダーシップもありますし、ボランティア精神も旺盛です。そうでなければ、務まらないでしょう。

ご存知の通り、一橋大学は伝統的に学生の自治がとても強い大学です。近年まで、学長選挙においては学生も投票権を持っていました。その学生自治の中でも、学寮の自治は際立って強いものがあります。国際学生宿舎の中で、その伝統ある寮文化を受け継いでいる一橋寮、中和寮、院生寮に肩を並べる留学生居住者の自治組織を立ち上げるとすれば、やはりそれらの学寮で執行部を経験したような学生が必要となります。

伝統のある学寮では、それぞれに独特なイニシエーションや行事があります。3つの寮が、それぞれに独立した建物に住んでいたときは、思う存分にそれができたと思いますが、国際学生宿舎という居住者の半分以上が留学生であり、幼児や乳児を含めた家族単位で住んでいる留学生もいる宿舎に移って来たからには、止めてもらわなければならないものも出てきました。細かくは言いませんが、酒にまつわるもの、罰ゲームなどで服を脱ぐような行為、深夜におよぶ騒音が伴う行為です。別な言い方をすると、留学生から見ると文化的あるいは宗教的な理由からとても受け入れられないような行為です。それ以外にも、留学生居住者と日本人の寮生間で揉め事やいさかいが突発的に起こりました。

教師よりRAの方が解決できる問題

そのような問題の解決に当たっては、教員である主事がむやみに出て行くと、まとまる話もまとまらなくなることをRAから教わりました。学生同士の問題、学寮組織同士の問題は、学生同士で解決するという基本線があり、教員が出て行くのは、学生同士でどうしても解決できない場合のようです。しかるに、RAに3学寮委員会の経験者がいると、彼らは現職の学寮委員会メンバーから見れば先輩であり、気心も知れていますから、話がきちんと通ります。結果として、5年近く経ってみると、開館当初問題になった寮のイニシエーションや行事は、大幅に少なくなり、留学生からの苦情も減ってきました。私も宿舎の専門委員会を通じて、3学寮委員会のメンバーには、異文化理解や多文化共生に関わる話を何度もしたのですが、RAも含め地道な努力をしてきた結果がやっと実ったという感じでした。

この異文化理解や多文化共生の観点からいえば、RAのもう一つのタイプとして求められるのは、留学経験や海外生活の経験があり、留学生との交流や支援に積極的な学生です。このタイプの学生の場合、留学生のサポートという点では非常に良い仕事をしてくれますが、留学生寮やフロアリーダー会という自治組織の運営管理という点では、必ずしも積極的でない場合があります。特に一橋以外の3大学から来るRAの場合、もともと自分の大学で、伝統的な学生自治がほとんどなくなっていることもあり、入居後、思い描いていたRAの像と現実のギャップに相当悩むケースがありました。留学生のサポートをするためにRAになったのに、なぜ自治組織の管理運営まで携わらなければならないのか、と私に

不満をぶつけてくるRAもいました。これには、4大学間で関係者のきちんとコミュニケーションが取れていないという問題も絡んでいました。職員の人事異動が続く中で、国際学生宿舎のRAに関する特殊性や事情がきちんと引継ぎされておらず、各大学の自前の宿舎に入居するRAと同列に募集されていることもありました。

RAの選考方法

現在は、4大学会議を行うようになり、大学間の情報交換やコミュニケーションがスムーズになり、かつ現職のRAが次期RA公募の際にきちんと応募者に仕事の内容や状況を説明したりするようになり、ずいぶん状況はよくなりました。本学ではRA応募者に対しては、私と留学生課の職員による面接だけでなく、現RAによる面接も行っています。現RAから見れば、自分たちと一緒に働ける仲間かどうか、RA全体としてのチームワークを考えたとき、求められる能力を持っている学生かどうかをチェックしてみたいということです。最終的には、私と留学生課の職員で、誰をRAとして採用するか決めるのですが、現RAによる面接の結果は、重要な参考資料として取り扱っています。また、次年度の募集からは、1月に次期RAの採用を決めてしまい、1月から3月までの間、フロアリーダー会議（定例会議）やイベントにボランティアとして参加してもらいながら、仕事の内容を少しでも入居前に理解してもらえるようにすることとしました。

12人のRAが卒業の関係で、時には半分近く一度に代わることがあります。こういうときはとても大変です。大学院生だけでなく、学部生を入れたりしながら、なんとか一度に多くのRAが代わらないように工夫していますが、うまくいかないこともあります。そういうときのために、今それぞれの仕事のマニュアルを作るようにしたり、これまでのデータを残したりとRAの間でも努力が積み重ねられています。

RAをした学生が卒業する時によく言っているのが、留学生との交流だけでなく、RA同士の交流がとても勉強になったということです。国際学生宿舎に関わる4大学はどれも総合大学ではありません。よって、例えば本学のRAにとっては、東京農工大学や電気通信大学の理工系や農学系の学生との交流、あるいは教員養成系である東京学芸大学の学生との交流は得るものが多いということです。

FLと留学生をどうやって主役にするか

次にRAとFLとの協働からFL及び留学生をいかに主役に持っていくかという課題です。当初、留学生居住者の自治組織における委員会を作るとき、「フロアリーダー会」という名前にしたのは、当時RAが少なかったという事情もありますが、留学生居住者の自治組織における実質的な執行部ですから、当然留学生居住者の代表、つまり各フロアの代表がそれを担うのがよいであろうと思いました。彼らが中心になって、留学生の自治組織を運営していくのが、自然だろうということで「フロアリーダー会」としました。

しかしながら、留学生居住者は、短期プログラムの留学生がいること、4月と10月の年2回入居時期があること、そして留学生の入居期間が基本的に最長2年であることなどから入れ替わりが激しく、当然FLも半年ごとに相当数代わります。最近になって、2年間の入居後、再応募ができるようになりましたが、それでも留学生入居者の入れ替わりが激しいことには変わりません。

ですから、自治組織としては構成員やFLが半年毎に変わっていくという不安定さを抱えています。よって、当初FLが中心となって運営する予定だった「フロアリーダー会」が、実質的にはRAが引っ張っていく委員会組織になってしまいました。RAがガイダンスやイベントにおいても、定例会議であるフロアリーダー会議においても、中心になって動かしてきました。そこで、FLはRAのサポートをするような位置づけになってしまいました。RAとしては、全部自分たちが動かして行って、FLや留学生が受動的な関わり方しかしなくなるのはよくないということで、FLが提案し中心となるイベントを行ったり、FLが主体となってそれをRAが支えるような運営ができないか、その一つがフロア援助金制度ですが、と工夫したりしていますが、なかなか難しい面があります。

それに付随して、留学生指導主事である私の宿舎におけるあり方、関わり方というのも課題があります。何度か申し上げたように、私が主事として入居した時には、留学生居住者の自治組織はありませんでした。RAもいませんでした。最初に今のフロアリーダー会の母体となるような組織を作るために、留学生課の協力の下、留学生居住者を全員招待し、親睦会を行いました。そこで、入居後数ヵ月たった居住者に宿舎での生活の問題や要望をあげてもらいました。その上で、そのような問題の解決や要望を大学に伝えるためには、自分たちの代表を決めて、まとまったかたちで出して行かなければならないことを訴えました。最後に居住者をフロアごとにまとめ、各フロアからFLを選んでもらいました。翌月から、留学生課とプラザ管理室職員の協力を得ながら、定例会議を行うようになったのです。その時はまだ、RAがいませんでしたし、東京学芸大学と電気通信大学からRAが来たときも、また人数が少なかったもので、しばらくの間は、本学のRAが制度化されるまでだったと思いますが、私が定例会議、現在のフロアリーダー会議を実質的に運営していました。会議通知から、議事進行、議事録の作成、そしてそれを学内の関係部署に渡し、改善をお願いするところまで、中心になって行いました。

もちろん、最初から私のもくろみは、RAの数が増えて、FLの制度が定着すれば、正式に留学生居住者の自治組織を立ち上げ、RAとFLで構成されるフロアリーダー会に運営を任せるつもりでした。そして、私は彼らのアドバイザーに徹し、彼らと大学の関係部署である留学生課や学生支援課、または館長である副学長への繋ぎ役になるという体制が、一橋大学の自治の伝統と3学寮組織の運営方法から見て、賢明だと思っていました。

主事からRA・FLへの仕事の移行

この形に移行するために、RAが増員されていく過程と留学生寮会費（留学生居住者が毎月払う自治会費）が安定して徴収されるようになっていく過程において、徐々に私がやっていた仕事をRAに移していきました。それを一橋大学の学寮出身のRAが中心となつてうまく引き継いでいって、自治組織の基礎を作ってくれたのですが、一部のRA、特に一橋以外の3大学からのRAからは、「主事が仕事をしなくなった」、「主事が仕事をRAに丸投げしている」と誤解されたこともありました。学生自治の強くない大学からやってきたRAにとっては、留学生の支援をしながら、自治組織の運営にも関わるということに、負担感があっただけでなく、そもそも自分の大学から頼まれた仕事以外のことをやる必要はないという抵抗感もありました。

私の中には、一橋大学の寮組織や学生自治の伝統と文化を踏まえた上で、国際学生宿舍の留学生居住者がより良い生活をおくれるようにするためには、大学の所属を越えて留学生がまとまり、3学寮と同レベルの組織を作り、その組織を通して留学生居住者をサポートしていくのが、ベストであるという確信はあったのですが、それを説いてもわかってもらえないこともありました。一時は、留学生居住者を大学ごとに縦割りにし、そこにRAと主事が付くようにし、4大学がそれぞれの大学の方針に応じて、留学生支援をすべきではないか、というところまで来ました。それに合わせて、留学生の居住エリアも棟毎に分けようという話も出ました。留学生寮、フロアリーダー会の立ち上げに尽力してくれた一橋の学寮出身の初期RAが卒業していったころは、やっと自治組織として安定してきたのですが、それと同時に自治組織運営に対する疲れが出ていました。また、RAの本来的な業務は何かということ、改めて考える機運がRAの中から出ていました。

大学により異なるRAの業務内容

次の11番のスライドを見てください。これは、各大学のRAの業務内容の比較表です。これを見てもらえばわかるように、各大学でのRAの業務内容が実ばらばらで、統一されていません。さらに、次の12番のスライドも見てください。RAに対する想定活動時間も異なっています。想定している活動時間が違うということは、RAに対する謝金の額も違うことになります。厳密に言うと、謝金の時間単価も異なっています。これは、RAという制度が4大学間で一斉にできたわけではなく、先ほど申し上げた通り、4大学で順に整備されていったことと、その過程で4大学間のコミュニケーションがきちんと取れなくなったことと各大学の抱える事情に起因しています。たとえば、最初にRAを作った学芸大学では、RAの業務に「入居時の受付」というのがあります。これは、短期プログラムの留学生一同が成田空港から貸し切りバスで直行し、宿舍に到着すると、入居手続きや貸布団の受け取りをサポートしなければならないからです。

2002年に国際学生宿舍が開館したときは、法人化の前でしたから、国立4大学の共同施設が一橋大学の小平キャンパスにあるという意識がありました。制度的にも、国立大

学が法人化するまでは、一橋大学の副学長を館長とする4大学合同の国際学生宿舎委員会があり、各大学の担当課職員と主事である教員で構成されていました。ところが、法人化後はその合同委員会が無くなり、一橋大学の学寮委員会と国際学生宿舎委員会が一つになりました。しかしその委員会には、一橋大学の関係者のみが出席できるようになり、留学生居住者を抱える3大学は出席できなくなりました。そして、だんだんと一橋大学の担当部署と3大学の担当部署との連絡や調整が行われなくなっていっていき、職員の人事異動で担当者も変わっていく中、入居者を選考して宿舎に送るだけ、RAが卒業すれば次のRAを選考して送るだけ、というように事務的な対応になってきました。

ですから、特に一橋以外の3大学からやってきたRAには、留学生寮やフロアリーダー会という組織や委員会について、何も事前に知らされていなかったということもありました。担当課の職員が、国際学生宿舎に来たこともない、見たこともないというようなこともあったので、無理ありません。RAの自治組織に関する仕事が不満の種となり、同じ時期に、3大学の職員には留学生居住者に関する問題は一橋大学にお任せという雰囲気になり、さらに3大学では、私と同様に任命されているはずの主事が機能しなくなってきました。

4 大学会議の開催

やっとRAと私の強い要望がかなえられ、今年の夏から4大学会議が行われるようになりました。この会議は、国際学生宿舎担当部署の教職員とRAが構成メンバーとなり、まずは問題意識の共有から始めました。最初は実に様々な問題がRAから提起されるとともに、教職員の問題認識の甘さが露呈しました。しかしながら、集中して会議を数回行ったため、それによっていくつかの改善が早急に図られました。その一つが、先ほどお見せした組織体制の改善によるプラザ管理室のワンストップ・センター化です。また、RAの担当フロア制を考慮して、RAの居室を変更してくれたり、卒業シーズンを前に早めに次期RAを決定し、新RAにフロアリーダー会議を見学してもらったり、新旧RA間の引き継ぎをする時間をきちんと確保できたりするようになりました。

新規入居者の部屋割りに関する資料としてのアンケート実施も行われるようになりました。そして、何よりも、国際学生宿舎の留学生居住者を支援していくためには、4大学の連携とその連携をうまく機能させるためのコーディネーションが必要不可欠であるという認識を教職員とRA間で共有できたことは大きかったと思います。一橋大学の留学生課と学生支援課は、そのコーディネーションを図る中で、リーダーシップを発揮すべきであるという意識も高くなりました。両課の課長も頻繁に国際学生宿舎へ視察にこられるようになり、大学を越えてRAと教職員の信頼関係も築けるようになってきたと思います。

先ほど申し上げたRAの業務内容および活動想定時間の統一問題は、未だ解決されていませんが、国際学生宿舎での留学生居住者支援には、留学生寮という自治組織、そしてフ

フロアリーダー会という委員会が必要であり、そこでRAが極めて重要な役割を果たしていることも、各大学で十分理解されたと思います。RAが現場で留学生居住者の抱える問題や要望をきちんと集約し、それらの改善案と共に主事や関係部署、そして国際学生宿舍専門委員会に提案してくれることにより、留学生の声が大学の執行部まできちんと届くようになりました。そこで提案される改善案も現場を知るRAならではのものがあり、尊重されています。

フロアリーダー会の最初の成果は、小平キャンパス内にある如水スポーツプラザの利用料金を3大学の留学生に対しても、一橋大学の学生と同様、学生料金にしてもらったこと、さらに夫婦・家族棟に居住している配偶者や家族にも同じ料金を適用してもらえるようになったことです。このスポーツプラザは、一橋大学の卒業生会である如水会が作ったものですから、当初は一橋大学の学生のみ学生料金が適用されていました。しかしながら、留学生と日本人学生との交流を考えれば、宿舍の居住者が家族を含め、同じ料金でスポーツプラザを利用できることが重要であると訴えました。

地域との交流

次に成果と課題の2、スライドの13番に移ります。まずは地域との交流の問題です。小平キャンパスのすぐ側にKIFAのオフィスがあります。KIFAというのは、Kodaira International Friendship Associationの略で、日本語名は小平市国際交流協会です。小平市の支援の下活動されている国際交流団体です。国際学生宿舍からみれば、極めて近い場所にあり、常設の相談コーナーだけでなく、いろいろなイベントを実施されていて、宿舍の留学生も招待されるのですが、参加者数はそれほど多くありません。

地域の交流プログラムについては、短期プログラムの留学生や滞日期間が短い留学生、例えば研究生などは、かなり参加してくれますが、大学院生など長く日本にいる留学生はあまり参加してくれません。国立大学の留学生しか居住していませんから、どうしても大学院生の留学生が多く、学芸大学の短期プログラムの留学生を除けば、本学を含め大学から離れている国際学生宿舍には、日本の生活にすでに慣れている滞日期間の長い留学生を居住させる傾向にあります。つまり、交換留学生、日本語日本文化研修生、研究生など在学习期間や滞日期間の短い留学生は、大学の敷地内にある宿舍に居住させ、何か問題が起きてもすぐに対応できるようにしています。また、電気通信大学や東京農工大学の留学生は、理工系ですから、研究室で泊まり込みながら実験をすることも多く、宿舍には寝るときにしか帰らないということもよく聞きます。

KIFAからみれば、留学生とその家族で450人も住んでいる宿舍ができれば、地域との交流やイベントへの参加が増えるという期待が高かったようです。しかしながら、実際には、熱心な呼びかけにもかかわらず、参加者はそれほど多くなく、少々失望感があります。フロアリーダー会とKIFAの共催で、「留学生と語る会」や「餅つき大会」を行うなど、

地域ボランティアとの交流を深めようという試みは続けています。

市役所との連携

市役所とは、ごみ処理の関係で連携を取っています。小平市はごみを細かく分別して出さなければならないことで有名です。ごみ減量にも積極的に取り組んでいます。ですから、1年に2回行われる留学生新規入居者のオリエンテーションでは、小平市役所リサイクル推進課の職員に来てもらって、ごみの分別について説明してもらっています。例えば、牛乳パックをごみとして出す際は、まず中身を空にしてすすぎます。その後切り開いて1枚の紙のようにして、乾かしてから出さなければなりません。プラスチック類など、燃えるごみか、燃えないごみか、判断が難しいものもあります。そういうことを、きちんと説明するにはやはり市役所の担当職員に来てもらうのがよいという判断からです。ごみの分別が悪いとき、特にD棟（夫婦・家族棟）の配偶者や家族が理解してないときには、改めてそういう居住者を対象に説明会をやったこともあります。

商店街との連携の難しさ

次に商店街ですが、こことは少々問題があります。一橋大学の教養部が小平キャンパスからなくなり、商店街には一時期、失望感があつたようですが、900名近くの学生を収容する宿舎ができるということで、またビジネスに対する期待感が高まったようです。しかしながら、国際学生宿舎が開館しても、商店街は活性化するどころか、逆に店を閉める商店が増えてるように思います。商店街の方々からは、「宿舎ができてもお客は増えない」、「居住者の半分以上は留学生らしいが、彼らは買い物に来てくれない」といった不満が寄せられました。一方、留学生のマジョリティであるアジア系の学生と話をしてみると、週末に新宿などの都心へ買い出しに行っているというのです。自分たちが買いたい食材や品物は地元の商店街にはないために、都心のエスニック・コミュニティで買い物をするというのです。

RAとFLが共同で編集している「国際学生宿舎留学生ハンドブック」では、宿舎周辺の商店を地図と写真入りで紹介しているのですが、大規模量販店とコンビニエンス・ストアを除けば、留学生はあまり利用していないようです。しかも、キャンパス内のカフェテリアが市民に対しても開放することになったため、商店街は客を奪われると怒ってきました。私は商店街の世話役の方とお話した時に、留学生ハンドブックの地図も見せて、留学生居住者向けに商店街の紹介をきちんとしていることを示すとともに一つのアイデアを出しました。

それは、このような地元の商店街マップは、本来商店街で作ってもらいたい。できれば、日本語と英語で併記してもらい、そこにはクーポン券をつけてほしい。それができれば、新規入居者のオリエンテーションの時に配布します、というものです。クーポン券は、大

きな金額である必要はなく、ちょっとした遊び感覚のあるものがよいと付け加えました。実は、このアイデアは私の留学経験から来ています。私がアメリカに留学した時、オリエンテーションで大学周辺のレストランやさまざまな商店、床屋さん、ガソリンスタンド、文房具屋などを含んだ大きな地図をもらいました。その地図の周りには、クーポン券がびっしりと並んでいました。私はそれを使って、多くの店に「お試し」に行きました。「お試し」から常連となった店もありました。しかし、残念ながら、小平キャンパス周辺の商店街では、このアイデアは未だに採用されていません。

また商店街は、フリーマーケットや秋祭りをキャンパス周辺で行っており、その際にも留学生の参加を呼びかけられました。商店街からは、会場の出店用の区画をいくつか用意するから、そこで留学生が自分の国の料理を作って、売ってくれるとありがたい、というお話でした。協力しようとしたのですが、調理器具、プロパンガスや発電機といった出店に欠かせない備品は、自分たちで手配しなければならないと言われ断念しました。お金の問題ではなくて、そういう備品を運び込んだり、戻したりする時の搬送まで、自分たちで行わなければならないと言われたからです。宿舎では居住者が自家用車を持つことは禁じられているため、自分たちで備品を搬送することはできません。商店街がこのあたりの事情まで、考慮してサポートしてくれたら、実現できたかと思いますが、商店街にも予算等の限度があったようです。商店街と留学生の相互理解はまだ十分ではありません。

小中学校との交流

次の学校訪問ですが、近隣の小中学校から留学生を派遣して欲しいという依頼がよくあります。これに対しては、一橋大学の学生サークルである「すなふきん」を活用しています。このサークルは、一橋大学留学生センターの横田先生の授業での活動から発展したサークルで、留学生の学校訪問を促進することを主たる活動としています。簡単に申しあげますと、一方に留学生を招待したいという小中学校があり、それをデータベース化し、もう一方に小中学生との交流を試みたいという留学生がいて、それもデータベース化し、その間をつなぐインターフェイスの役目をするサークルです。

国上市近隣の小中学校のニーズに応じて、「すなふきん」のメンバー（ここには留学生も含まれます）が登録している留学生に打診します。実際に学校訪問をする留学生が決まると、学校へ行って事前の打ち合わせをします。小中学校の先生方と打ち合わせをして、訪問の準備を行います。このときに留学生の学校訪問を教育的に意義あるものにするためのモデルを提案します。これには、事前学習から当日の学校訪問での内容、その後のフォローアップ学習も含まれています。また、留学生に対する謝礼やその他の条件面の提示も含まれています。このサークルの活動によって、それまで大学の留学生課や宿舎のプラザ管理室に、学校から留学生派遣の依頼があり、それを職員がボランティア的に対応していたものから、システムティックなかたちで派遣依頼を受けられるようになりました。

.....

留学生が「人寄せパンダ」的に学校に呼ばれたり、「何でもいいですから、好きなことを話してください」というような丸投げ的な依頼をされたりすることもあります。それらに対しても、「すなふきん」から意味ある交流になるようなプランを逆提案できるようになっています。また、訪問する留学生にとっても、学校によって待遇や謝礼がバラバラでは、混乱を招きやすいので、それについても「すなふきん」からガイドラインを提示するようにしているようです。彼らの取り組みは非常に好評で、最近是个々の学校からの依頼に対応するというよりは、教育委員会から一括して依頼を受け、年間計画のもとに学校訪問を行っているようです。また生涯教育プログラムへの参画も依頼されているようです。詳細については、本学留学生センターのサイトにあるBridgesという雑誌の中の「新入生のための国際交流パスポート」のページ³、または「すなふきん」のウェブサイト⁴を見てください。

市民向けの講座

次に市民向けの講座ですが、これは国際学生宿舎が開館した2002年から毎年1回、小平キャンパスで、小平市役所、小平市国際交流協会と一橋大学留学生センターの共催で、「留学生理解のための講座」を行いました。留学生センターの教員だけでなく、近隣の地域や大学で留学生と地域の交流に尽力されてきた方々、長い間海外駐在をされた企業の方々も講師に招き、留学生を地域でどう受入れるかというテーマだけでなく、異文化間コミュニケーションのスキルや留学生・外国人との共生に関わるトピックについて、講義を行いました。

その次の津田塾大学と日本語講座のところは、いっしょに話をします。ご存知の方もいると思いますが、一橋大学の小平キャンパスから津田塾大学までは、徒歩で10分ぐらいです。津田塾大学には、日本語教育の課程があるのですが、留学生が多くないためにそれを実践する場がないようです。そこで、津田塾大学の先生からの依頼を受けて、国際学生宿舎の留学生を対象として、津田塾大生が日本語教育を実践できる場を提供することにしました。その話があったころとほぼ同じ時期に、日本語教師として長年活躍され、新しい教科書を出版された方から同様に、その教科書を使って留学生に日本語を教える場をいただけないか、という依頼がありました。この二つを結びつけ、国際交流プラザの会議室を使って、日本語講座が始まりました。実際にそれを活用する学生は、留学生よりも夫婦・家族棟に住む留学生の家族や配偶者が多いようです。宿舎では、日本語だけでなく、華道と茶道の講座も行っています。これは地域の「さくら会」という国際交流活動を行っているNGOから、師範の方々に来ていただき教えてもらっています。

³ <http://cse.hit-u.ac.jp/publications/publication.htm>

⁴ <http://ameblo.jp/snafkins/>

あまり進まない日本人学生と留学生の交流

さて、日本人学生と留学生との交流ですが、これまでの私の話から分かるとおり、宿舎における両者の交流はあまり進んでいません。交流を進めるためには、混住を進めることが最も効果的な方策だと思いますが、実際には中和寮の飛び地として居住している日本人学生と留学生が一部同じフロアで混住しているだけです。留学生寮のイベントに日本人学生を招待したり、3学寮のイベントに留学生が招待されたりすることもあります。参加者が少ないのが現状です。混住こそが、国際学生宿舎の存在意義にも関わる大きな課題だと思っています。

次のパブリックに対する意識や概念についてですが、これはもしかすると、私の偏った見方があるかもしれませんが、最近の日本人学生はパブリックなものに対する尊重や尊敬の意識が薄いように思います。日本人だけでなく、留学生の中でもアジアからの留学生には、欧米からの留学生に比べ、そういった面で意識の薄い学生が目立つように感じます。国際学生宿舎のような高層の学生宿舎には、居室のタイプによる違いはありますが、共用部分をはじめ公的なスペースと居住者が占有して使用している私的なスペースが入り組んでいます。また、私的なスペースに居ても、公的なスペースとは隣り合わせです。よって、個々の居住者が公的なスペースを尊重し、私的なスペースと同様に扱わないことが大事なのですが、このあたりがモラルの意識も含めて、低下しているため、例えば、居住者の入れ替え時期、いわゆる入居と退去が続く時期には、至るところに粗大ゴミが放置されたり、居室の備品がなくなったりしています。

今後改善すべき点

先ほどの話で、国際学生宿舎には4大学がかかわっているため管理運営の面で、問題や困難な点が多いことはおわかりいただけたかと思います。ここでは、今後国際学生宿舎のどこをどう改善すべきか、という観点から、私案をお話したいと思います。

大学間の費用分担の見直しや長期的な整備維持プランの必要性

まず、一橋大学以外の3大学が宿舎の管理運営に関する応分の負担をすべきだと考えます。具体的には、宿舎の管理運営に関わる居住者一人当たりのコストを算出し、「その金額×大学の居住者数」を3大学がそれぞれ一橋に納めるというものです。国立大学法人化に伴い、宿舎費は文部科学省の省令からはずされたにもかかわらず、国際学生宿舎の宿舎費は以前のままで、たとえば单身室は月5千円です。共益費を4千円徴収していますが、それを考慮しても、小平キャンパス周辺にある学生向けアパートの家賃から比べれば格段に安くなっています。

現状、居住者が支払う宿舎費や共益費だけでは、これだけ大規模な宿舎の管理運営費は賄えません。今年、国際学生宿舎が5年目を迎え、そろそろ施設の至る所で、修理や回収

が必要になってきています。経費削減の関係でプラザ管理室の人員も減らされ、開室時間が前より短くなりました。午後9時まで開いていたものが、午後5時で閉められるようになりました。管理室の業務を一部警備会社にアウトソーシングした関係で、守衛室と管理室が一体化し、効率化が図られました。それでも管理室そのものに常駐している職員が3人というのは、800名弱という居住者数を抱え、しかも、そのうち450名が留学生とその家族ということを考えれば、少なすぎることは明らかです。3大学が居住している留学生数に応じて、応分の財政的負担をしてくれれば、宿舍管理運営の財政的自立性が高まるだけでなく、居住者へのサービス向上が図られます。

さらに、宿舍は現在、将来の大規模な改修に対する財政的な備えもありません。これについては、維持管理費、メンテナンス費のような名目で居住者から徴収し、積み立てる必要があるでしょう。これを宿舍費の中に入れて、宿舍費そのものを増額するか、あるいは宿舍費の外枠で徴収するか、という技術的なことはさておき、いずれにせよ、このような資金の積み立てが必要です。政府からの交付金や補助金頼みでは、これからは立ち行かないと思います。国立大学も法人化されたわけですから、私立大学と同様に、減価償却を計算し、長期的な施設の維持管理に関わるプランとその財政的な裏付けを持つことが必要です。

国費留学生の宿舍費は安すぎる

スライドの項目の順序と前後しますが、宿舍費の関連で、私は国費留学生を大学の宿舍に入居させる際には、私費留学生よりも高い宿舍費を設定すべきだと思います。国費留学生、そしてJICAやIMF等から国費留学生と同等の奨学金をもらっている留学生が私費留学生と同じように、5千円の宿舍費というのは、あまりにも低すぎます。国費留学生が大学の宿舍に入居できると、奨学金を節約でき母国に送金しているという話をよく聞きます。日本政府が出している奨学金は、留学生の日本での生活や勉学に充てられ、日本国内で消費されるべきものと考えます。大学が宿舍費を私費留学生と国費留学生で区別しないことにより、結果として国費留学生の母国への送金を手助けするようなことになっているのは、国費留学生制度の趣旨に反するのではないのでしょうか。

これに関連して、本学のように留学生全体のうち、4割程度が国費留学生の場合、その国費留学生を多く抱える研究科から、国際学生宿舍にもっと国費留学生を入居させるべきという話が来ます。つまり、私費留学生より、国費留学生を優先して、入居させてほしいということです。学内の大勢は、留学生が希望すれば、全員大学の宿舍に入居できる状況にない現状から、経済的に苦しい私費留学生をできるだけ多く入居させるべきということでは一致しています。しかしながら、その一方、「国費留学生は日本政府が招待したお客様の留学生である」という認識が残っていることも事実です。「私費留学生は財政能力証明書を提出して、留学ビザを取得しているのだから、民間アパートの家賃を払うだけの経

済的能力を持ってなければおかしい」というような暴論まで出てくることがあります。

皆さんもご存じの通り、日本の留学ビザでも、アメリカのF1ビザ（留学ビザ）でも、その在留資格認定証明書申請において必要とされる金額は、留学の最初の1年間分をカバーする生活費と学費の合計のみです。決して、入学する課程の最低修業年限をカバーする財政能力証明書ではありません。誤解のないように申し上げますが、私は何も国費留学生を大学の宿舎に一切入居させるべきでないと言っているわけではありません。国費留学生は入学時に、ほとんどが新規渡日ですから日本語能力を含め、日本での留学生活をするためには、最初、相当な困難を伴うことは疑う余地のないことです。ですから、彼らに対するセーフティ・ネットとして、来日時にキャンパス内にある大学の宿舎を提供することは当然必要なことです。しかしながら、半年後なり、1年後には、民間のアパートなり、大学外の宿舎に移ってもらわなければならないと思います。もちろんこの時に、大学が生協や地域の不動産業者などと協力して、国費留学生が次の宿舎を探せるようサポートをきちんと行うことは欠かせません。私の見たところでは、このあたりのサポートがまだ出来てない大学が多いようです。

日本における国際交流会館、留学生向け宿舎の今後のあり方

それでは最後のスライドに移ります。ここでは本学の国際学生宿舎を含め、日本における大学の国際交流会館をはじめとする留学生向け宿舎について、今後のあり方や展望を述べたいと思います。

日本人学生と外国人留学生のための教育の場

まず、宿舎を単に学生のための居住施設ととらえるのではなく、教育の場としてとらえ、その理念と意義を明確にする必要があると思います。これまで、国際交流会館等は留学生しか入居できず、「外国人留学生に廉価で安全な住居を提供する」という極めて現実的な使命を持っていたと思います。しかし、これからの宿舎は、日本人学生が留学生と共に居住し、異文化理解への意識を高め、共生への試みの場とし、文化や民族を越えた能力を身につける教育施設に変えていかなければ、その存在意義と社会への説明責任を果たせないのではないのでしょうか。

そのためには、宿舎において、日本人の居住者をRA等に限定すべきではなく、真に留学生と日本人学生が混住する場としなければなりません。私は少子高齢化で、日本が移民を政策的に受入れる日が、ごく近い将来に始まると思っています。そのとき留学生から移民という流れは、ひとつのマスになるでしょう。その流れで、共生社会を作り上げていく日本人のリーダーが必要となるわけで、そのリーダー育成の場を留学生と日本人学生が寝食を共にする混住型宿舎が担えるのではないのでしょうか。また、グローバル化の進展で、実業界のほとんどの分野で国内完結型のビジネスはなくなっていくでしょう。グローバル

化した社会では、海外の人々とのコミュニケーション・スキルや異文化への深い理解と寛容性が求められます。今、企業はそのような環境で生き抜く問題解決型人間を求めています。このような能力もった人間を育成する場として、混住型宿舎の教育的機能と役割が認識されるべきです。

この点からいうと、立命館アジア太平洋大学や南山大学瀬戸キャンパスにある混住型宿舎は、先進的であると言えるでしょう。どちらの宿舎も、設計の段階から留学生と日本人学生がどのように共生するかということ意識して作られています。一つのユニットの中で、留学生と共に居住する日本人学生は、ピア・アシスタントやピア・アドバイザーのような役割を担っており、合わせて宿舍費の補助や謝礼金の制度も整備されているというように、日本人学生へのインセンティブも考慮されています。慶応大学も新しい宿舎を日吉キャンパスに作りました。この宿舎のユニークなところは、運動部の学生と留学生を混住させているところです。混住する場合の組み合わせとしては、とてもユニークだと思います。

宿舎の管理運営における大学院生の活用

さらに、宿舎の管理運営については、大学院生をもっと活用すべきだと思います。アメリカの大学の宿舎に行きますと、相当大きな建物でも日本の感覚で言う正規職員というのは、一つの棟で1、2名です。しかしながら、宿舎のカウンターは、週末も含め24時間オープンしていることが多いのです。これは大学院生がそこで、アシスタントシップなどを得て仕事をしているからです。本学や京都大学など研究型国立大学では、大学院重点化の影響で、大学院生が増えました。しかしながら、大学院生の増加に伴って、大学院生向けの奨学金が同様に増えたわけではないので、多くの大学院生が経済的に苦しい立場にあります。彼らを大学の管理運営部門で積極的に活用することによって、彼らの知的能力や経験を大学が生かしつつ、経費（人件費）削減にも貢献できるでしょう。大学院生にとっても、大学から経済的支援が得られるということだけでなく、宿舎の管理運営に携わることによって、組織におけるマネジメント能力が身につくということで、まさに一石二鳥ではないでしょうか。アメリカのドミトリー的発想をすれば、管理運営部門だけではなく、宿舎の居住者に対する支援を行うスタッフとして、大学院生等を採用することも重要でしょう。

本学の国際学生宿舎でもRAがいますが、それだけでなく、カウンセリングやアドバイジングにかかわる担当者や同じ居住者というレベルで居住者をサポートするピア・アシスタントのようなものも、学生を活用して実施できると宿舎の教育的機能は高まります。もちろん、その職務内容や責任範囲によって、学生への給与や謝礼金には差がでてくるでしょう。総じて今の日本人学生は、自立心やリーダーシップが強くなく、何かをしてもらうことに慣れきっているところがあります。マネジメント能力や自主性が欠如しているように思えます。自己主張が強い割には、人のために犠牲的精神を発揮する者が少なくなっ

いるようです。よって、自主性、マネジメント能力、リーダーシップの育成、そして異文化間コミュニケーション力を身につけさせるためにも、宿舎の管理運営に日本人学生を積極的に取り込むべきだと思います

Academic Community and University、アウトソーシング、PFI

次のAcademic Community and Universityですが、これは私のアメリカ留学の経験から研究型大学では、宿舎においても、それを意識した学術的なコミュニティづくりがなされればよいと思います。具体的には、大学院の学生、例えばロースクールの学生が主として居住しているエリアを作る、そこに海外からの客員研究員も入居し、同じ分野を研究している学生と研究員が宿舎においても意見交換ができる場をつくるというようなものです。アメリカの大学の大学院生向けの宿舎には、学生だけでなくポスドクの研究員や海外からの研究員も居住することが、よくあります。

最後のアウトソーシングとPFI方式の導入ですが、東京ではすでに大手の大学で宿舎の管理運営をアウトソーシングしているケースがあります。PFI方式についても、東京農工大学や電気通信大学で検討していると聞いています。この二つの大学は、一橋と同じように多摩地区にあります。宿舎が不足しているということをよく聞きます。法人化後は政府に頼って、宿舎を建設してもらうことは大変難しいことから、プライベート・ファンディングの導入が検討されるのは、地方自治体の施策と同様に、時代の流れと言えるでしょう。その検討過程では、建物の中に学生宿舎だけでなく、商店や介護施設などを組み込み複合的な施設として建設しようということも視野に入れて、検討されているようです。

ただし、このPFI方式では、事故が起きた時の責任問題、災害の際のリスク管理、そしてサービスを請け負った業者が破たんした場合の措置などにおいて、まだ問題があるようです。また、民間活力の導入という点では、大学が民間のアパートを借り上げ宿舎として利用することを支援するような国の施策が必要だと思います。地方自治体との協力については、例えば福岡市など地方都市においては、市営団地や市営住宅に留学生が入居できるような支援策が行われています。残念ながら、一橋大学近隣の自治体とはこのような連携が行われていませんが、UR都市機構の住宅は多摩地区に多いので、将来留学生用の枠が設定されることを望みます。

RAの作ったビデオ上映

それではここでRAが作った新規入居者向けガイダンス用のビデオを見てください。

(ビデオ上映)

今日お見せしたビデオは、日本語だけでしたが、実はまだ施策段階で現在これに英語の

字幕を入れているところです。ビデオの中で紹介された8月のキャンプまたは海水浴と2月のスキーは、留学生寮会にとって大きなイベントです。スキーツアーでは、初心者が多いので、スキーウェアや用具の手配、スキー学校の予約など準備は本当に大変ですが、RAは実到手際よくやってくれています。このようなイベントについては、留学生寮会費による予算で補助をしているため、留学生の参加費は安く抑えられています。また、留学生居住者が借りられる共通の備品、例えばバーベキューセットやクーラーボックスなども留学生寮会費で買っています。それら備品を保管する倉庫もあります。

男性： 会費を払いたくないという留学生がいませんか。

太田： 払いたくないという学生が最初の頃にいました。ところが、ガイダンスでRAやFLが、会費についてきちんと説明するようになってからはなくなりました。ここで大事なことは、居住者が支払った留学生寮会費がどのように使われるか、還元されるかについて、具体的に説明することです。

ガイダンスと居住者のマナー、イエローカード制度

ガイダンスでは、居住者のマナーについてもしっかりと説明しますが、これはなかなか悩ましい問題です。FLやRAは、マナーに関する苦情処理が大きな仕事の一つといっても過言ではありません。単身室で週末ごとに友人を泊める人がいる、週末ごとに共用スペースでパーティをする人がいる、大音量で音楽を聴く人がいる、シャワールームの使い方が悪い、キッチンで歯磨きや洗顔をする人がいる、冷蔵庫に入れておいた食べ物が取られたなど枚挙に暇がありません。

そこでフロアリーダー会では、イエローカード制度をつくりました。迷惑行為が起こった場合、FLとRAが事実確認をし、まず注意を促します。当該者が注意に従わなかった場合、次のフロアリーダー会議で、そのことが提起されます。FLとRAでイエローカードを出すことが承認されると、私の名前で発行します。これは、ガイダンスの無断欠席にも同じ処置が適用されます。ちなみに、ガイダンスは新規入居者だけではなく、留学生居住者全員が出席することになっています。ガイダンスでは、全体ミーティングの後、フロアごとに分かれてミーティングを行い、そこでFLを選出してもらいます。ガイダンスは、新規入居者がある半年ごとに行われますが、同じFLが継続する場合があります。

迷惑行為を行っているものが見つからない場合もあります。たとえば、一時期、共用スペースであるダイニング・キッチンでの盗難が頻発した時期がありました。食べ物だけでなく、炊飯器や鍋釜の類まで盗まれていました。この件について、盗難が頻発しているフロアとそうでないフロアの担当RAやFLとじっくり話をしてみてわかったことは、フロアのコミュニティがきちんとできていない所に盗難が多いということです。

フロア・ミーティングがよく行われ、共用スペースの掃除もきちんと定期的に行われ、居住者同士が挨拶をしているような所では、盗難は起きていませんでした。その逆の場合に盗難が起っていました。フロアのコミュニティ作りの重要さを痛感しました。先に述べた「フロア援助金」は、コミュニティ作りを支援するための制度として、各フロアに支給されるようになりました。フロアのコミュニティづくりで難しいところは、あるフロアに特定の国籍の留学生が固まってしまい、一人か二人だけが違うという場合です。現在は、4大学会議などを通して、大学間の連携や調整が取れるようになり、入居者の部屋割りにについても注意が払われるようになりましたが、一時期はそれが十分でなかったために、一人を除いて、すべて同じ国籍の留学生というようなフロアができてしまうことがありました。

こうして振り返ってみると、約5年間をかけて、このような一つのかたちができ、コンクリートの塊だった宿舎に魂と温もりをこめることができたのではないかと思います。宿舎運営に大事なことは、ハードウェアではなく、人間臭いソフトウェアではないかと思えます。本日は、森先生にこのような機会をいただいたことによって、私自身も国際学生宿舎での歩みをレビューすることができました。感謝申しあげます。ご清聴どうもありがとうございました。

司会： どうもありがとうございました。（拍手）ということで、もう少しお時間に余裕があるかと思えますので、ぜひこの機会ですので、ご質問なり何かございましたら、ご自由にお話しいただければと思いますが、いかがでございましょうか。

混住化の難しさ

蘭： 私、蘭と申します。京都大学国際交流センターの教員です。もう10年ぐらい前からこの京都大学もそうですけども、ほかの大学なんかでも混住化ということは言われるけども、なかなか実現しない。実際、京大でも吉田寮とか熊野寮とかでは混住していますけども、国際留学生会館というのがあると、どうしてもやっぱり留学生だけっていう形になり、なかなかうまくいきません。

太田： 非常によくわかります。実は、私が赴任した時、一橋大学の3学寮は国際学生宿舎においても、まだ独自に留学生の入居者を受入れていました。つまり、当時留学生は留学生枠としての入居者募集に対して、留学生課へ入居申請を出すと同時に、学寮枠としての募集に対して、学生支援課へ入居申請を出すことができました。しかしながら、このやり方では、留学生の入居希望者が留学生枠、学寮枠どちらにも応募し、どちらにも受け入れられてしまうということが起こり、事務サイドで混乱をきたしました。よって、開館後1年ほどたってから、留学生は留学生枠でのみ入居申請を受付けるようにしました。これ

.....

で事務的な混乱はなくなりましたが、日本人学生と留学生の混住はRAを除いて完全になくなりました。国際学生宿舎のすべての棟が稼動した2003年以後、院生寮の居室枠を拡大してきましたが、拡大した割には大学院生の入居希望者が多くないという話を聞いているので、院生寮のところで別途留学生を受入れてもらい、試行的に混住できないか検討しているところです。

イエローカードや「Bridges」の編集

横山： 本日の講演にお礼を申し上げます。それと、ずいぶん前に京大の国際交流会館 RAをしたこともあり、先生のお話を聞いて懐かしかったです。

終わりの方でおっしゃっていた理念、偉大なことやなと思いました。コミュニティを作るということの場合、何をするにも年齢が輪切りになって、学生なら学生で教員はまた教員でなりがちですけど。ほんとはやっぱりコミュニティとしてはもっと老若男女揃った方がよいでしょう。運営大変ですけど、いろんなことができると思います。やりたいと私も思っています。もし何かあったら教えていただきたい。私はハウスアドバイザーという名前が嫌いだったので、ハウスアポロジャイザーって言っていました。確かに勉強やっている人がいて、こちら側で晩になったらにぎやかになりますよね。間に入って私はアポロジャイズをまたやって、イエローカードは考えませんでした。

太田： イエローカード制度は、国際的なスポーツであるサッカーの制度から拝借したので、留学生にも理解されやすいようです。これはRAやFLたちによるすばらしいアイデアだと思います。イエローカード制度規程というのも出来ていて、日本語と英語で併記されています。

男性： 「Bridges」という雑誌はどなたが編集されているのですか。

太田： 留学生センター指導部門の教員が交代で行っています。この雑誌は入学式の時、新入生全員に配布します。新入生に対して一橋大学の国際交流活動の全体像が見えるような情報提供、そしてそれらの活動への参加に対する動機づけを狙っています。加えて、大学だけでなく、国立市や小平市でも配布し、地域の方々による留学生支援を呼びかける雑誌という側面もあります。

司会： お話がつきないとは思いますが、この辺で終わりにさせていただきます。あらためて太田先生にお礼を申し上げたいと思います。（拍手）

太田： ありがとうございます。（了）